

●千葉大学名誉教授、薬学博士 佐藤 哲男氏 寄稿

▼第18話 「説明と同意」は誰のため

皆さんは病院で医師から病状や手術について説明を受けた経験があると思いません。これを「インフォームド・コンセント」（略してIC）と言い、日本語では「説明と同意」と訳されています。医師が患者に対して、治療内容の方法や意味、効果、危険性、治療にかかる費用などについて、十分にかつ分かりやすく説明し、そのうえで治療の同意を得ることがICです。しかし、診察室では、医師の説明を聞くだけで、それについて質問する患者は少ないのです。その理由は、診察室の中では無意識のうちに上下関係が出来るからです。その上、説明内容は各医師によって微妙に異なります。学生に教えるように詳しく説明してくれる人もいるし、全く事務的に一方的に話す医師もいます。医師は「患者の立場」を考えて説明するのが仕事ですし、患者が十分に理解しなければ何の意味もありません。

ICは手術のときには特に重要です。医師にとって、患者の入院や手術は日常の業務ですが、患者にとっては一大事です。肝臓や腎臓など大きな臓器の場合、「手術が必要だ」と言われただけで気が動転しているので、医師の説明はほとんど上の空で頭に入りません。こんなときに冷静に話を聞いてちゃんと理解して納得することが出来たら神業です。

私の経験を述べます。白内障の手術をしたときの事です。白内障の手術は、今では日帰り出来る程簡単になりましたが、手術前日に担当医から型通りの説明がありました。彼は眼の解剖図や、白内障の原因、手術はどんな方法で行うか、など手元の説明資料を見ながら30分程説明しました。説明が終る頃何気なしに手術承諾書の病名のところを見てびっくり仰天しました。手術する眼は左なのに、右眼に○印がついているのです。「私の手術の眼は左ですが」といったら。医師は慌てる事なく、右眼の○にバツテン印をして、左眼に○をしました。つまり、医師にとってはその段階で左右どちらでもよかったのです。彼が平然と右から左に書き換えた意味は後でわかりました。手術当日、手術室の看護師が私の手の甲に「左眼」と書いた絆創膏を貼り、手術時に医師はカルテを見て左眼を確認してから手術に入りました。つまり、医師は当然ながら手術室での作業の手順から考えて、左右を間違える事はない事を予め知っていたか

ら、外来での説明は型通りで彼の責任は果たした事になるのです。

最近では医療過誤の裁判が多く報道されています。手術室で健全な腎臓を間違えて摘出したり、左右の肺を間違えて手術したりなど考えられないことが現実に行われているのです。ICは医師と患者の双方にとって重要な意味をもっています。手術の後で医師の不手際で患者が不利益になった時に、患者や家族とのトラブルをおこさないためのものでもあるからです。特に、検査入院や手術の時のICは患者にとって大変重要です。局所麻酔薬や全身麻酔薬を使う場合、手術そのものの危険性とは別に麻酔薬の危険性があります。多くの麻酔薬は気体ですから、身体の中に入るとその分だけ酸素が追い出されて、長時間の麻酔では酸欠状態になります。最悪の場合は呼吸停止状態になります。従って、全身や下半身だけの麻酔の場合には、一般に酸素吸入をしながら酸素を補給して手術をします。手術中は常に血圧や心臓の拍動数と同様に、血液中の酸素濃度を自動的に測定しながら行うのが常識です。最近では、手術のときには十分に教育、訓練を受けた麻酔専門医が麻酔を担当しますので、昔に比べて麻酔による事故は極端に少なくなりました。

病院の外来で患者が医師から説明を聞くときには、一方的に聞くだけではなく患者側も次の様な心構えが必要です。

- 1) 医師が患者に手術の説明をする場合は家族が同席すること。これは、気持ちが動転している患者だけでは十分に理解しないことがあるので、冷静な立場の家族にも立ち会って貰うことにより、医師、患者側双方に誤解をなくするメリットがあります。
- 2) 病名や病状の進行状況、手術による病状の回復の可能性について納得するまで質問すること。
- 3) その病気についてどんな治療法があるのか、また各治療法の利点・欠点を十分に理解すること。
- 4) 患者本人や家族が医学関係の書物を読み、自分の病気についてある程度の基礎知識を得ておくことと医師との話し合いがスムーズになることがあります。しかし、時には医師のプライドを逆なでする事もあるので度を過ぎない様に発言することを勧めます。

ICはもともと患者が医師の説明を理解するために出来た制度ですが、医療過誤裁判で医師に説明義務があることを認めさせるための法廷内での戦略でもあるのです。しかし、時には医師側に有利になることもあります。患者や家族が手術承諾書に署名したら、その時点で「すべてお任せします」という意思表示

になるからです。医師の説明で納得いかない場合には、理解するまで十分に質問することが肝要です。

***特別連載寄稿「健康、心、薬」第十八弾に続く！！**

